令和７年度　その人らしさを支える「緩和ケア」研修
事例検討資料

A 氏　　75 歳　女性
病名：大腸がん再発　腹膜播種
家族：夫（78 歳）と二人暮らし　長女（５２歳）は結婚し夫・子供２人と同市内に在住。
　　長男（48 歳）は独身で本州に住んでおり、仕事が忙しく年に１回会う程度。
職業：専業主婦
性格：明るい。友人やご近所との交流も多い。いろいろなことは夫と相談して決める。

A さんは 60 歳代のころに大腸がんと診断され手術を受けた。その後半年ごとに検査を受けながら経過観察中であった。腹満感や便秘傾向を感じ、受診したところ上記の診断を受けた。手術は難しく、腹水の貯留もみられた。根治は難しいが進行をなるべく緩やかにすることや、症状の緩和を目指して化学療法の提案を受け、家族と相談し外来化学療法を受けることを決めた。夫と一緒に通院し、化学療法を受けていたが、３クール目を終えたところで言葉のでにくさや左手足のしびれが出現し、脳梗塞の併発を認め、これ以上の化学療法継続は困難との診断を受けた。言葉の出にくさと左上下肢の軽度の麻痺が残ったが、脳外科病院でのリハビリを経て、自宅へ退院。予後は治療ができない状況のため、半年～1 年程度と説明を受けた。
自宅退院にあたり、介護認定を受け要介護１との認定を受けた。訪問看護、訪問診療を導入し自宅での療養が開始となった。

・ご自宅での生活を支えるにあたって必要な情報を書き出してみましょう

A さんの ADL

トイレ～伝え歩きでひとりで行ける

入浴～洗身や洗髪はゆっくり自身で行える。手すりにつかまりながら浴槽をまたぐことは可能だが転倒のリスクは高い状況。

食事～摂取は自身で可能。今まで専業主婦で毎日 3 食調理していた。退院後は夫が食事の準備を行う予定。同市内に住んでいる娘も協力してくれる。

A さんの身体的な症状

痛み～腹部全体の張り感や痛みがあり、入院中からフェントステープ 1 ㎎使用中レスキューでオキノーム 2.5 ㎎が処方されている

吐き気が時々あり、食事摂取が難しい日もある

排便はスインプロイク錠と排便状況に合わせてモビコールを内服し、1 日 1 回排便あり

A さんの希望

「できるだけ家で過ごしたいが、家族に迷惑はかけたくない。最後は入院のほうが安心かな…」

A さんの夫の希望

「本人の希望を叶えられるようサポートしたいが、今まであまり家のことはしてこなかったので不安もある。」

・A さんの支援をしていくにあたって、大切にしていく視点を考えてみましょう